



行く年来る年

義原富喜子

(鹿児島)

年の瀬に宣伝カーが賑やかに闘牛大会触れてまはれる

闘牛の盛んな島に生まれしが六十五年観ることなかりき

大晦日は「年取りご飯」と豚骨がごちそうなりき幼きころは

九十七歳母のアカペラワンマンショー家族九名手拍子添へる

見守れば四曲しつかり歌ひさる老い母ありて良き年は来む

新しき年の四日は墓参り御神酒を交はす墓石の狭間で

島流の祝ひの席は太鼓、三味線、踊りで締める昔も今も

六調の太鼓、三味線鳴り出せば杖を放りて嫗も踊る

黒糖を口にする度よみがへる祖父母の工場の黒蜜の味

甘蔗を植ゑ馬鈴薯作り牛を飼ふ働き者の若者増えぬ

「餅貫ひ」の豊年祝ひ子供らは集落めぐりてお菓子をもらふ

会ふたびに「ハブは出ませんか」と問うてくる大阪のひと隣りに来たり

引つ込みがちでもの言はぬ男の兎牛の話には目を輝かす

島人は老いも若きも浮かれ出すワイドワイドと「闘牛慰み」に

「島の子に輝く目を」と開塾し夫と歩めり三十年を

このごろの私

ようやく生徒に添った授業
をしていると思えるようにな
りました。孫世代の生徒たち
と会話にずれを感じることも
ありますが、もう少し頑張っ
てみたいと思います。サブリ
メントを飲みながら。



虹の手前

泉 陽太郎

(東京)

このごろの私
最近(今更ながら)新古今
和歌集をちびりちびりと(も
ちろん解説付きで)読んでお
ります。何となく日本語なの
がとても不思議です。遠い昔
の風景はずなのですが、遠
い未来のように感じます。

夕暮れの小さな沼に一通り愚痴って帰る教会の道

便座には無数の棘が生えていて告解室に流れる擬音

楽園はつまらなかつたと長靴を脱いで虹から下りくる男

毎日が休日ならば休日が無くなると説くエデンの朝礼

時間はね消しゴムなんだ何だつて消してしまえるほらあの虹も

あなたとの時間は虹を薄くして安息日には教会へゆく

指先の血で愛と書く鏡文字虹のなかには赤がないから

落雷の木立は黒く消えうせた我が友の後姿をみせる

飲み残しの羊水撒けば永遠の芝生にかかる虹の粒々

まろやかに硝子をつかむ指の股今日のイモリは虹の具現者

エレベータ皆が降りたそのあとで閉じるボタンは虹のボタンに

本当は神様なんていないのです見知らぬ町で虹の聞き込み

思い出の手紙束ねたクリップは錆び跡残しこと切れていた

青春はよかつたような気がしますもう繰り返すことはないから

もう二度と待ち合わせない噴水にそれでも虹のひかりは満ちる